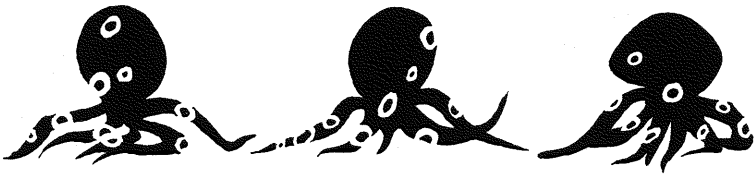
巻頭言

「想像力」から「創造力」へ

秋山　光文

いつの時代にあっても、弱者の存在が脅かされるという構造が繰り返されてきています。最近、子どもたちを取り巻く環境が年ごとに悪くなっていくように思われるのは気のせいだけではありません。とりわけ、子どもたちが関わる事故や事件が多発しているのは、大変悲しむべきことです。昨年の四月に附属小学校の校長に任ぜられ、初めて大勢の児童と対面した折、まず頭の中に浮かんだのは、どの様にしたらこの子どもたちに安心して学ぶことのできる安全な環境を提供出来るかということでした。

子どもの教育に多くの功績を残したジャン＝ジャック・ルソー（Jean-Jacques Rousseau, 1712～78）は、その著作『エミール』（一七六二）のなかで、「想像力」というこ

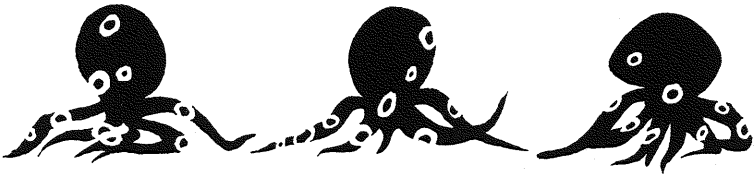


とを、《他者の傷み、苦しみを感じ取ることのできる唯一の能力》と書いています。彼と同時代の江戸中期に、大阪に創建された懐徳堂という学問所の初代塾長を務めた三宅石庵（一六六五～一七三〇）もまた、儒学（当時の朱子学）で説く「仁」という概念を《人間の寛容さ、同情、慈悲心の基礎》と捉えていました。「仁」とは人の道のことを指しますが、徳川時代に儒学と対立して興隆した国学でも、『源氏物語』の根本的な思想として「物ノアワレ」を大きく評価する態度がありました。表現は違うものの、石庵も「物ノアワレ」を大切に考えていたのです。孟子を媒介として、「物ノアワレ」を知る受動的な能力を、同情という他者の苦しみを共感する能動的な能力とつなぎ合わせました。そして《物ノアワレヲ知ルガ仁ナリ》と言っているのです。洋の東西に違いこそあれ、同時代を生きた二人の思想家が他者の傷みを共感することに注目していたことは興味深いことです。

翻って考えてみますと、現代のわれわれに最も不足しているものといえば、まさに「想像力」ではないでしょうか。便利な道具に囲まれ、欲しいものはほとんど手に入れることができます。ともすれば自己中心的に物事を捉え、自ら求めるものを得られないときに、他者を攻撃するという短絡的な行動が生み出されているようです。われわれに最も求められているのは、《他者の傷みや苦しみを感じ取る》ことではないでしょうか。自らの欲望を満たすために、他者に危害を加えようと試みる行為は、決して許されるものではありません。また、精神的・物質的に多大な喪失感を味わうものに救いの手を伸ばすのは、同じ世界に生きる人間として自然な行為でしょう。

他者との関わりというのは、何も人間にばかりに限られるわけではありません。「自然との共生」を謳った万国博覧会が開幕し、大勢の入場者で連日にぎわっているようです。自然と人間とが共生するにもやはり前述した「想像力」が欠かせません。ともすれば便利さや快適さを求めるために、多くの自然が失われてきました。昨年度のノーベル平和賞を受賞したケニアの女性活動家ワンガリ・マータイさんは、開発の名の下に自然破壊の進んでしまった故郷ばかりでなくアフリカ全土に失われた自然を取り戻そうと、貧しい女性たちに呼びかけて植林事業を始めました。この緑化推進運動が「環境を保護するだけでなく、持続可能な発展を保つための土台を強化した」と評価されたことは記憶に新しいことでしょう。去る二月に来日された折、筆者の勤務するお茶の水女子大学から名誉博士号が授与されました。働くだけで自立できない女性に植林という社会的な仕事を提供し、かつ対価を払うことで自立を支援し、その後も教育や社会の問題解決を通じ環境と政治の関係について気づかせ、独裁政権に立ち向かう勇気を与えたことは感動的で、若い日本女性たちが目指すモデルとなるというのがその理由です。マータイさんは受賞式の折のスピーチで、自ら始めたグリーンベルト運動と呼ばれる植林事業により、すでにアフリカ全土に三〇〇〇万本もの樹木が植えられ、失われた自然環境を取り戻す原動力となっていることを紹介して下さいました。また、短い日本滞在中に私たちが忘れかけていた「もったいない」の精神を日本人の美徳として見いだし、資源を効率的に利用する基本的な姿勢を広めたいと話されました。

弱者の社会的意識を高め、自然環境の回復を目指したマータイさんの行為はまさに「想像



力」をさらに発展させた「創造力」といえないでしょうか。弱者の存在をしっかりと理解し、弱者を保護するためには何をなすべきなのか。われわれは、常にこの答えを求め続けられているのです。しかし、いつもこれを身近な問題として捉えているわけではありません。とりわけ未知の存在に対しては想像力をはたらかせるしかありません。他者の存在をどのように捉えるか、まさにルソーの提言するように目に見えぬ《傷み、苦しみを感じ取る》努力をしなければならないでしょう。その努力の積み重ねが、やがて豊かな人間関係、シティズンシップの構築へと繋がっていくことになります。創造力（creativity）という概念は、何も実在するものを作り出すことのみに限定されることはありません。自らの存在を社会の中に如何に位置づけるのか、他者と如何に共生していくのか、これこそ想像力（imagination）を豊かにしなければ実現出来ないことなのです。こうした想像力を高めるためには、他者に対して公正かつ公平な思いやりを常に持ち続ける必要があるでしょう。まさにこのことが、石庵のいう《物ノアワレヲ知ルガ仁ナリ》にあたるのでしょう。子どもたちに安全で安心できる教育環境を与えていくことは、われわれができ得る最低限の義務と責任であることはいうまでもありませんが、それ以上に必要なのは弱者の《傷み、苦しみを感じ取る》日頃の心構えでしょう。われわれが受け継いできた他者を思いやる精神をこれまで以上に残していくことで、次の世代そしてその後に続く世代にまで「想像力」豊かな子どもたちが育っていくに違いありません。

（お茶の水女子大学附属小学校長）